



① 門井慶喜 著

『札幌誕生』

② 仲地宗俊 著

『現代 沖縄農業論 :持続可能な農業の 構築に向けて』

日本の南北の端、北海道と沖縄。明治以降の歴史と切っても切れない両地の農業を、昨年刊行された小説と学術書から読み解きたい。

① 『札幌誕生』

本書は、札幌にまつわる5人の人生を描いた小説だ。農業関連の学術書というわけではないが、明治維新以降の開拓時代の農業に関する話が多いので、あえて本欄で取り上げたい。

北海道の発展には、後の屯田兵の貢献も大きいが、まずもって、開拓の中心となる札幌という街を建設しなければならない。わずかな営みしかなかったところに、道、橋、を作っていく。このさまが第一話で描かれる。「北海道開拓の父」とされる開拓判官の島義勇の取組だ。

市内を流れる「創成川」は、出張のたびに目にしていたはずだが、本書を読んだ後の見え方はまったく違った。そもそも名前から何かを連想すべきだったのだが、ピンときていなかった。この川は、開拓初期から中核的に大事な場所であったわけだ。後に、市のさらなる発展のため、石狩川治水事務所長の岡崎文吉（第五話の主人公）によって手を加えられた。したがって、今私が見ているものは義勇らが「大友堀」と呼んでいたものとはやや違う。そうした変遷を知れば、川自体が「北海道開拓の経緯を

理解しろ」と迫ってくるように思えてくる。この「人為によって拓かれた」という実感は、私の北海道観を大きく変えるものであった。

新幹線で青森側から青函トンネルを抜けると、車掌が「ようこそ北の大地へ」と挨拶してくれる。これは、雄大な自然を楽しもうと北上してきた人間へ自然界が発するメッセージを人間が代弁しているのだ、と聞いたときは思っていた。ただ、この本を読んで開拓について少しばかり触れた後は、そこで頑張っている北海道民が本土の者に向かって、「俺たちの切り拓いた土地へようこそ」と言いたいのでは、と思えるようになった。手つかずの自然が残る地域でありつつ、概念としては人為的な空間、という特殊な地域なのかもしれない。もっとも、アイヌの方々にとっては、明治以前の営みを無視した本土側の勝手な解釈なのだろうが。

有島武郎の第四話も面白い。実はこの第四話は飛ばして読んでいた。島義勇の第一話と内村鑑三の第二話が、農業関係の内容が充実していて気に入ってしまい、作家の物語に触ることでこの充実感が薄まるのを避けたかったからだ。しかし、やはり全部読まないと、と思い返して再びページをめくれば、そこには驚くべき結末が待っていた。最後は、有島はニセコ町に所有する農地を小作人に解放して農業の組合を作るという話になっていた。「有限責任狩太共生農団信用利用組合」のことで、今日の農協に連なる産業組合とは系譜を異にするものの、農協グループの一員として親近感を覚えずにはいられなかった。

② 『現代 沖縄農業論』

沖縄の農業が本土と異なるのは、気候や離島の多さ、基地の負担ゆえの「特殊性」だけではない。表層の下にある歴史的な「深層」にこそ、その本質がある。それは前

述の北海道を巡る状況とどこか似ている。それに気づかされる本だ。

すなわち、明治維新の際に、本土とやや違う農政が温存されたこと。また、第二次大戦後に、米軍統治という歴史の断絶ゆえに農地解放が実施されなかったこと。日本農政の大きな転換点のこの二つの時期に、沖縄は独自の経緯を背負う。このため、農業そのものの捉え方が本土と少し異なるのではないかと推測される。今や、制度的には（振興計画の存在などを除き）本土との差異はなくなっているわけだが、農業に対する意識や捉え方には、なお本土と異なる部分が残っているのではないか。——本書はそう示唆する。

さも分かったように書いているが、沖縄で農業と言えばサトウキビしかイメージしていなかった自分は、本書を手に取って初めて、沖縄では戦後の農地解放がなかったということに気づかされた。知識というより意識が足りなかった、実は何も見えていなかったのだと痛感させられた。この視点の欠落を埋めてくれた著者に敬意を表しつつ、今後はさらに理解を深めていきたい。

読んで感じたのは違いただけではない。本土との共通点を見いだすことも楽しい作業だった。例えば、沖縄本島の都市近郊で園芸中心の農業が広がってきたさまが確認できるが、これは本土で見られるのと同様だ。これらは本土とか沖縄とかという地域を問わず展開する経済学的事象と言える一方、上述のごとく、農業には土地の経緯を引きずっていく社会学的事象としての側面もある。この二つが沖縄研究を通じて重なり合うさまは、近代的な農業は非自発的で急激な制度変更にどう対応していくのかという点で、旧東ドイツ地域の農業が東西統合後に辿った展開、あるいはまだ紛争の出口の見えぬウクライナで、農業が停戦後に見せるであろう展開などにも通じるものがあるかもしれない期待させる。

真北と真南を貫くもの

さて、この2冊の書評を同時に書いたのは、共通点があると思ったからだ。明治維新がさまざまな経緯の起点となっていること、南北の端で本土と異なる気象ゆえに観光地として共に栄えていること。

そして、国防の観点が色濃く漂う土地で行われている農業だという点。今日でこそ食料生産基地である北海道への明治政府の関心は対ロシアの国防に始まっており、農業開拓と国防が融合した屯田兵が全道でプレゼンスを示す必要があった。そのためには南端に函館があるだけでは不十分。内陸の札幌がその運動の起点として建設されたのだった。また、沖縄においては、離島農業が、暗黙のうちに国境離島における実効支配の証しとして位置づけられている。採算性だけでは語れないものを農業が負わされているとも言える。また、不幸なことに、本島では基地の存在が農業の負担ともなっている。南北の地理的な隔たりを超えて、両地には通底する歴史的宿命がある、と言うとやや飛躍し過ぎであろうか。

あることを知ることで、見慣れた景色がまったく違って見えることがある。今回の2冊は、その感覚を強く呼び起こしてくれた。これだから読書はやめられない。

——「札幌誕生」河出書房新社 2025年4月
定価2,250円（税別）560頁——

——「現代 沖縄農業論：持続可能な農業の構築に向けて」筑波書房 2025年2月
定価3,800円（税別）330頁——

（常務取締役 小畠秀樹・おばた ひでき）